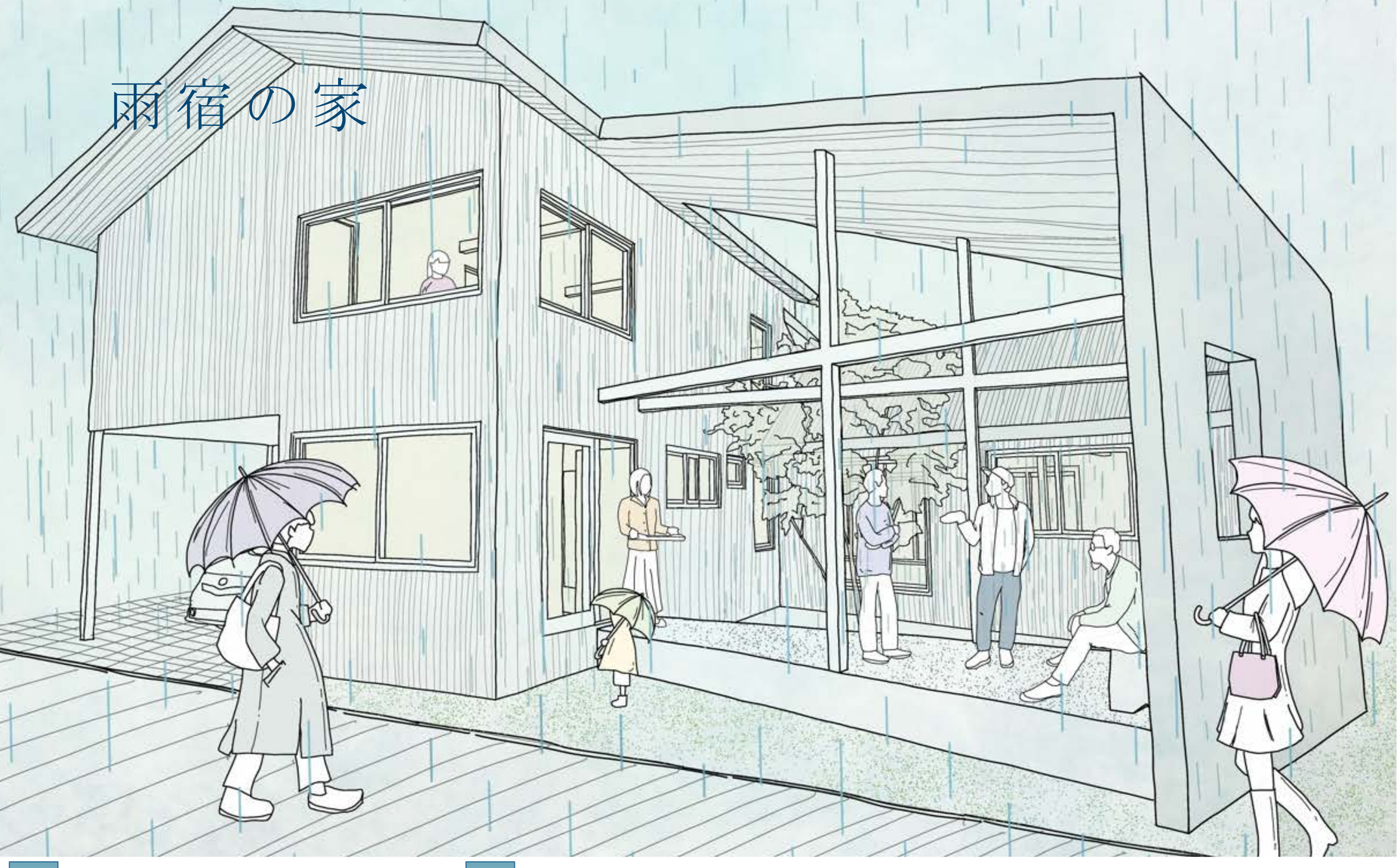
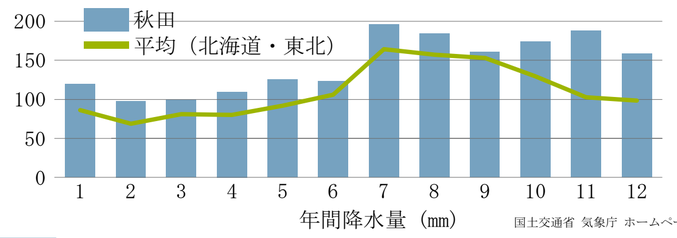
雨宿の家



00 背景

秋田県は北海道・東北7県のなかで年間降水量が1番多く、降雪量も全国で3番目に多い、雨や雪が身近な地域である。

しかし、今年7月に秋田県の広い地域で大雨災害を経験し、雨に対して良くないイメージを持つ人も増えてきているのではないだろうか。



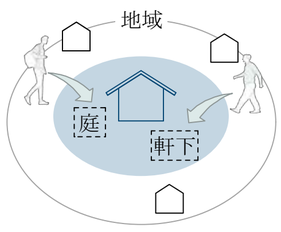
国土交通省 気象庁 ホームページ

01 問題提起

a. 街に閉鎖的な住宅

近年の住宅はプライバシーへの配慮などから、街に対して閉鎖的であるように感じる。しかし、店舗併用住宅などの例外を除き、住宅内に公的空間を設け、街に開くことで、人を集めることは難しい。

そこで、庭や軒下空間のような個人の所有空間ではあるものの、空間的には閉じず、街と繋がっている空間の構え方が需要になるのではないだろうか。

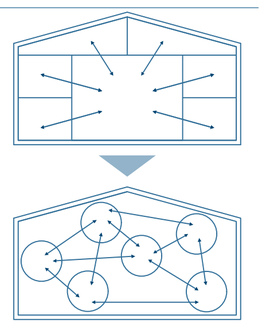


a. 関係が固定化された空間郡

新型コロナウイルスの影響で在宅時間が延び、家での暮らし方を見直す機会が生まれたことはいいことであった。

しかし、在宅時間が延びたことで、個人の時間を大切し、各空間を独立させ家族が集まる場所がどこかにあるという住宅形式が好まれるようになったと感じる。

空間同士がもっと柔軟に離れたりくっついたりして、空間に多様な関係性が生まれることで、人同士の関係性も多様になっていくのではないだろうか。



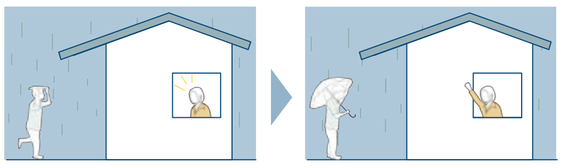
02 敷地

秋田県由利本荘市土谷の住宅街を敷地とする。
田畑と庭付きの低層住宅が混在し、住民の高齢化は進むものの、幅広い世代が居住する。近くに公立大学があることから大学生も多く生活しているが、地域民との交流はほとんどない。
冬期は北西からの風は強いが、雪はそこまで積もらない。

03 コンセプト　天気のうつろいに他者との関係性を委ねる

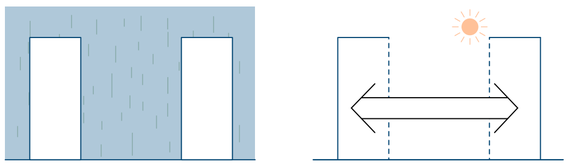
a. あまやどりの家

敷地にあまやどり空間を設けることで、地域の人が集まる住宅を提案する。
はじめは雨宿りのために軒下をかりただけであったが、そこで住民と交流し、新たなコミュニティが生まれることで、雨を合図にして人が集まってくる。



b. あめやどしの家

雨によって家の中の様々な空間同士の関係性が変わる住宅を提案する。
雨の日は空間が独立し、晴れの日は庭を介して空間が繋がり、家族同士の関わりが強くなる。雨で空間同士の関係性が変化することで、人とのつながり方も変化する。



04 住まい手

家族構成

夫	36歳	UI/UXデザイナー
妻	34歳	インテリアデザイナー
娘	6歳	小学生
息子	4歳	幼稚園

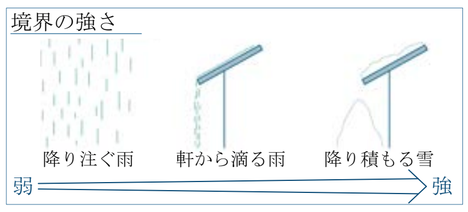
娘の小学校入学のタイミングで、両親の地元である秋田へと東京から移住してきた。

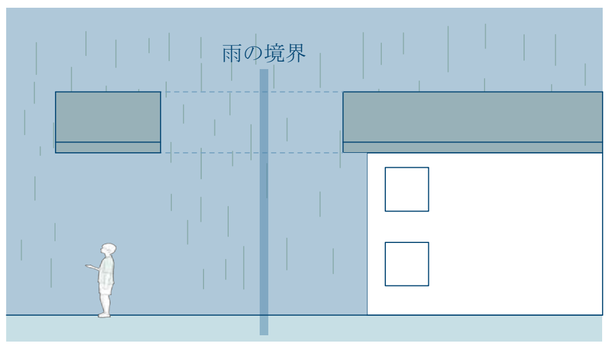
デザイナーという職を活かし、地方創世に携わりたいと考え、地域とつながりをもった生活を目指している。

05 設計手法　雨の境界

雨宿り空間にはパブリックが必要である。そのため、プライベートが強い住宅の軒下は雨宿りしにくい。

そこで、雨宿り空間の軒高を高くする。また、私的な空間との間に雨の境界を設ける。

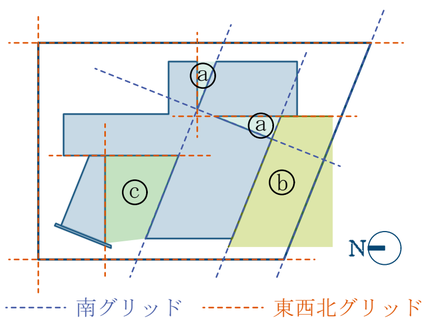


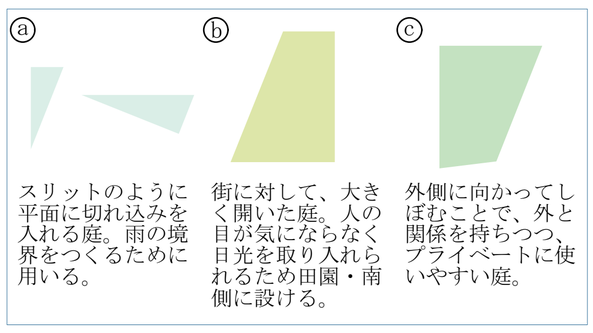


06 提案　二重のグリッドによる多様な庭

敷地は、東西南北に垂直水平な向きから、南側のみやや傾いている台形敷地である。そこで、東西南北に垂直水平なグリッドと南側の傾きと垂直水平なグリッドを重ねて平面を構成する。

これにより、ごちゃつきを抑えながら、室内や敷地外と多様な関わり方をもつ庭をつくりだす。

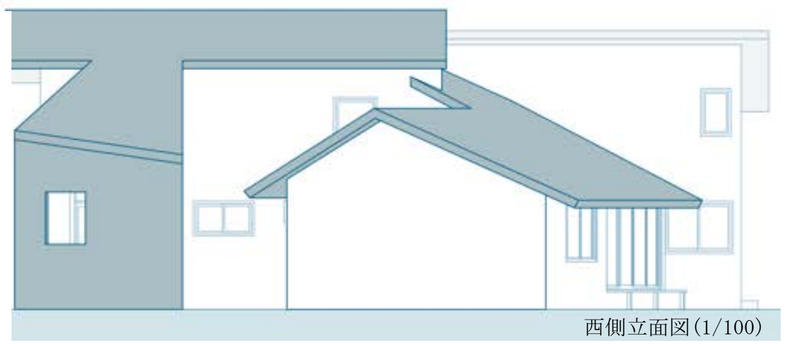




07 断面計画・立面計画

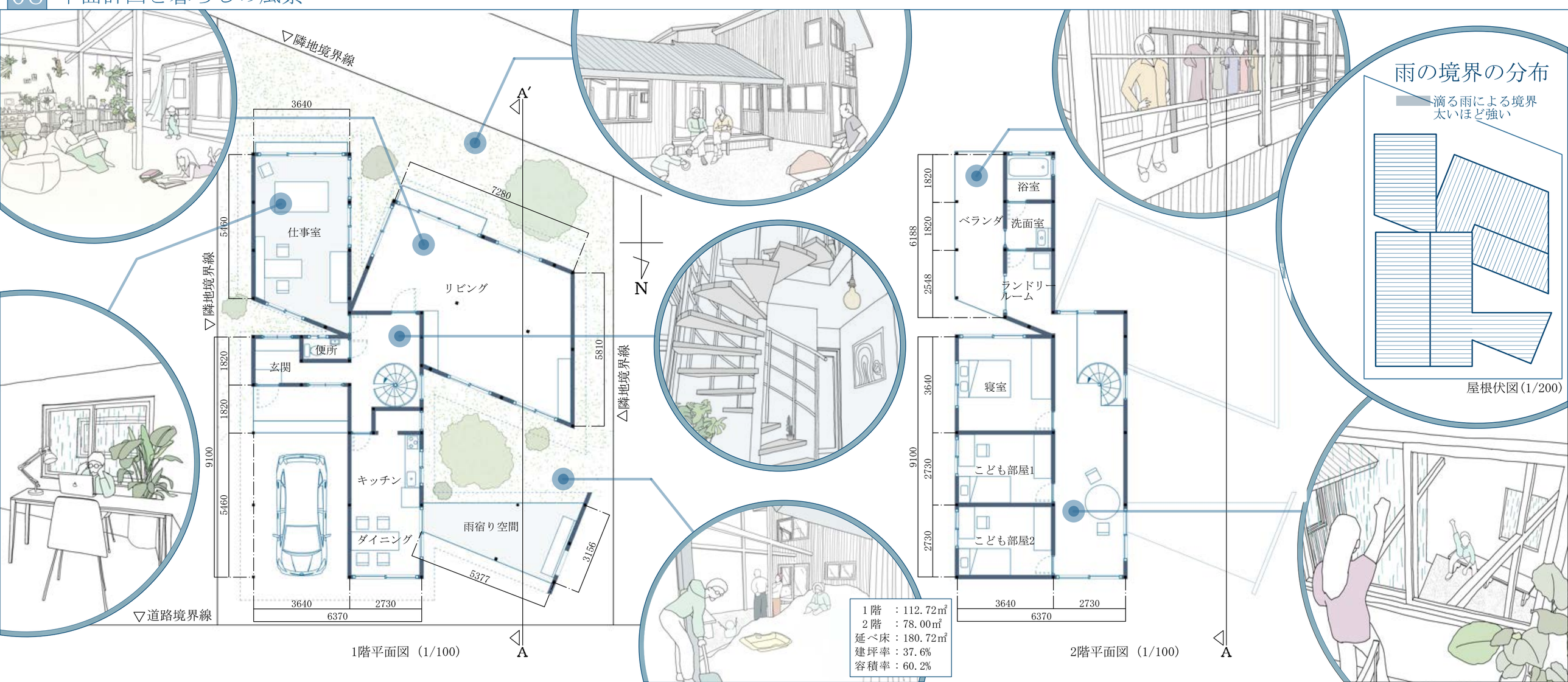
A-A′断面図(1/75)

北側立面図(1/100)



西側立面図(1/100)

08 平面計画と暮らしの風景



1階平面図（1/100）

1階	：112.72㎡
2階	：78.00㎡
延べ床	：180.72㎡
建坪率	：37.6%
容積率	：60.2%

2階平面図（1/100）

屋根伏図(1/200)